

知っとるね？水天宮

“知ってるようで知らない水天宮のこと”

1185年3月の壇ノ浦の戦から逃げ延びた平家一門の按察使局(あぜちのつばね)伊勢により、筑後川河畔の鷺野ヶ原に初めて祀られました。

祠は、現在のブリヂストン久留米工場の付近にありましたが、幾多の変遷を経て、1650年9月、当時の有馬藩二代目藩主 有馬忠頼(ありまただより)公の計らいにより、現在の瀬下町に鎮座されておられます。

以来、全国各地、海外にまで数多く分霊された大小の水天宮は、全てこの久留米市瀬下町の水天宮を本宮とする御分霊社であります。なかでも、とりわけ関東で水天宮といえば、東京日本橋蛸殻町にある東京水天宮を指すほど有名で、その名は関東一円に知られており、連日大勢の参拝者で境内は賑わいます。

もともと、東京水天宮は現在の港区三田・東京タワーの近所に江戸時代末期まであった、有馬藩上屋敷内に分霊された御社でしたが、こちらは、子授けや安産祈願にご利益があると江戸っ子達に高い評判で、人々は屋敷の塀越しにお賽銭を投げ入れ、参拝を行っていました。

ところが、連日あまりに大勢の庶民が直接参拝を望んで屋敷を訪れるため、ついに屋敷の門戸は毎月5の日に一般開放される計らいとなり、一層の参拝者が訪れる事となり「情けありまの水天宮」と洒落た言い習わしも広まりました。

また、古来より農業、漁業、航海業者間に信仰が篤かった水天宮は、子供の守護神、安産の神、病漚、徐災招福の靈験あらたかと評判であったため、明治天皇御誕生の際には全国数ある神社、寺院のなかから、水天宮が「勅願所」に選ばれご誕生の祈禱が行われたという由緒ある名社でもあります。

私達、久留米市民にはあまりにも身近に在り過ぎて、水難除けの「瓢箪御守り」と「8月5日の奉納火花火大会」のイメージが強く、その有難みを忘れがちな水天宮さんですが、実は全国に向けて大いに自慢できる久留米の大事なお宝でもあったのです。

真木和泉守とは



真木和泉守保臣(1813~1864)は第22代水天宮宮司で、明治維新の先駆者としても活躍された人物です。水天宮神職の家に生まれ、かねてから学問に励み、国や藩の将来を憂い、誰よりも早く倒幕と王政復古を前提として藩政改革を企てますが、幕府を支持する藩の重鎮と対立、その後処分され、水田(筑後市)へ塾居(ちつきよ)されます。

その後、泰平であった江戸の世は大きく動乱を始めると、和泉守は東奔西走し、諸国の志士から「今楠公」と謳われ、その中心的指導者と仰がれました。早くから薩長連合の必要性を唱えますが、時ならず、長州藩と共に倒幕の軍を起し、禁門の変に敗れ、同志16人と天王山に登り辞世の和歌を残して自刃しました。和泉守52歳のことでした。

水天宮と御神紋椿の話

～安徳天皇の恋物語～



御神紋椿

安徳天皇は壇ノ浦の合戦により、わずか8歳の生涯を閉じたと歴史に残されている一方で、筑後川畔の鷺野ヶ原千寿院というお寺に潜幸されたとの言い伝えが久留米にあります。筑後の豪族の美しい娘・玉江(たまえ)姫は安徳天皇に仕えていました。

ある日、天皇は境内の清水の井桁に寄り添って咲いている美しい椿の花をご覧になり、その優雅で気高い風情に自身と玉江姫を重ね合わせ、玉江姫への想いを秘めた歌をおつくりになりました。

こうしてお二人は結ばれ、椿と共に永遠の愛を育まれました。この恋物語の由縁から、椿の花が神紋となりました。



水天宮恋ものがたり
紅白饅頭二個入 250円

縁起の良い紅白饅頭

～水天宮恋ものがたり～

水天宮に伝わる恋のお話にちなんで、久留米の菓子舗が心を込めて作った紅白饅頭です。原材料には地元の米粉に山芋を加えるなど、きめの細かさとしっとりした味わいが特徴です。